

Siva 神への礼拝儀式における atmasuddhi

折居 貴子

序

Siva 派はその名の示すとおり、Siva 神を最高神として崇めるヒンドゥー教の一派である。この派はさらにいくつもの派に分かれているが、なかでも有名で重要であるのは、教義や儀式について多くの經典や手引書を残してきた南インドの聖典 Siva 派と北インド・カシミアールの Trika である。

Siva 派の教義の根本には、Pati (主)・pasu (家畜)・pāśa (繩) という三つの原理がある。ātman (個我) はもともと清浄なものであるが、この世では mala (汚れ) や Karman (業) にとられ、繩に縛られがんじがらめにされた家畜のようになっていくという。したがって、ātman をもとの清らかな状態に戻すためには、この繩から解放しなければならぬ。すなわちこれが解脱である。解脱するためには、自分がそうした不浄な状態にあることを自覚し、一定の努力をしなくてはならない。mala が熟し Karman が消費されて、ātman が解脱に至る機が熟せば、主である Siva は dikṣā (潔斎式) を通じて恩恵を ātman に与えて完全に解脱させる。解脱したとき、ātman は本来の清浄な

状態に戻り、Siva と同じ完全性を持ち、もはや Siva と異なって見えない。個人の ātman と最高神 Siva の結合すなわち解脱が信者の最終目的である。⁽¹⁾

この ātman と Siva の結合は、聖典 Siva 派の文獻に記される儀式の中においても認められる。このことは dikṣā のような解脱に関係する儀式のみならず、解脱に直接関係しない儀式についても言える。例えば Siva 神への礼拝儀式もこの事例に当てはまる。

經典や手引書の祭式を扱う部には、信者が毎日どのような儀礼を行なうべきかについて説く箇所があり、そこで最も重要で中心的であるのが、Siva 神への礼拝儀式である。Siva 神への礼拝儀式は、Siva 神への礼拝 upacāra とそれに入る前の準備段階の諸儀式の二つの部分から成り立っている。準備段階では、礼拝に使用するものとしての ① ātman ② āstaya (場所) ③ dravya (祭具) ④ mantra (真言) ⑤ liṅga (男根型の石柱) を、礼拝するにふさわしい淨い状態にする儀式が行なわれる。淨めの儀式は重要で、これを終えた後でなければ upacāra に移ることができない。upacāra は、寺院の聖域内に設置した玉座に

Siva 神を招き、供物を供えて礼拝するというもので、礼拝儀礼の中心をなす。

この儀礼の中で ātman と Siva の結合が最もはっきりとあらわれるのは、準備段階における ātman を浄める儀式⁽¹⁾ すなわち ātmasuddhi である。本稿では、十一世紀の祭式手引書 Somasambhupaddhati に述べられる Siva への礼拝儀礼をとりあげ、ātman と Siva の結合が ātman の浄めにとつてどのような意味を持ち、儀式の構成にどのような影響を与えているかを考えてみた⁽²⁾。

1 ātmasuddhi の目的

ātmasuddhi は大きく分けて、bhūtasuddhi (bhūta の浄め) と nyāsa (mantra を置く儀式) から成っている。前半部分の bhūtasuddhi では、儀式執行者の身体から ātman を引き離し、身体の構成要素 bhūta を消失・変質させることで父母から生じた不浄な身体を浄める。そして後半部分の nyāsa において、浄められた新たな身体に ātman が結びつけられる。

(1) bhūtasuddhi

bhūtasuddhi で浄める身体は、私たちが理解している人体とは異なる、タントリズム特有の神秘的人体生理学に基づいたものなので、まずこれを理解する必要がある。いま、Somasambhu の説くところ (III.11-15) にしたがってこれを説明すれば次のよう

になるだろう。

身体の中を足の親指二本から頭頂部まで管 (一般に *sūsumnā* という) が走っており、管の内外には *sakti* が広がっている。Somasambhu の後継者 Aghorāśiva によれば、二本の管は生殖器官のあるところまで一本となり、この交点は *mūlāhāra* とよばれる。管の途中の心臓・喉・口蓋・眉間・*brahmarandhra* (頭頂部) には結び目があって管を塞いでいる。また、この五つの結び目の他に、*brahmarandhra* の上方に *dvādasānta* という場所があり、ここに Siva がいるという。

ātman の身体からの分離は、この管の中を、そこを流れる息を調節し、ちらち *bijamantra* と総称される子音と母音を組み合わせさせた音節を発音することによって、ātman を *dvādasānta* まで引き上げるといふ方法で行なわれる。これを順を追って示すならば次のとおりである。

まず、管を塞いでいる結び目を切つて ātman の通る道を開かなければならない。そこで管の下方の *randhra* という場所の真ん中にあり燃えるように輝く *hūm* という音節と、破壊の時にしばしば用いられる *phat* という爆発の音節の一组を息を吐きつつ発して、五つの結び目を下から上へ次々と切つてゆく (12-13)。そして、炎の音節 *hūm* はもとの場所に戻される (13)。

次に、*caitanya* という認識力と行為力の二面を持ち全身に広がっている ātman が心臓に集められるが、集められ星の様相を帯びた ātman は *ham* という音節となる (14)。次に、心臓と

う容器に入れられた ātman を hūm の炎の上に置き(14) ātman が全く清浄で bindu (点)になるのを想像して、息を止める(15) すると hūm は上へ向かって押される息に助けられて、容器に入った ātman を携えて、管の中を brahmarandha を上昇する(15)。そして、息を荒く吐くことと、ātman を brahmarandha から dvādasānta へ送り出し、そこでは Siva に一聲結びつける(15)。

こうして身体から分離された ātman は、ちみちみの dvādasānta にいる Siva と結びつき、次に身体の浄めのために、tattva の消去と bhūta の消去の二つの方法が示される。

世界の開展とともに生じた三六の階梯である tattva の消去は、開展とは逆に辿って、各 tattva をそれぞれが生じた一の前で帰入させることによって達成される。Somāsambhu は、これらの tattva を Bindu に帰入させて浄めるべし、と述べている(16)。tattva の帰入はなきの ātman を身体から離し dvādasānta へ到達させることに同時に起るものであり、聖典 Siva 派の者たちによって ātman の身体である微細身 (sūkṣmadēha) の浄めと言われている。ここでは、tattva を帰入させて消失させ、開展前の清浄な状態に戻すことが浄めであると考えられていると言えるだろう。

これら対して bhūta の消去は bhūta びびきた粗入身 (śūladēha) の浄めと言われる。bhūta は身体を構成する地水火風空と

いう五つの要素で、足から頭まで広がっている(18)。同時に bhūta は宇宙の構成要素である。なぜなら、五つの bhūta 地水火風空はそれぞれ nīriti、prasthā、vidyā、sānti、sāntyaṅgā、と五つの kala (語義は「部分」) びびやじぶるが(18-27) 五つの kala は身体を構成するとともに宇宙を構成する要素でもあるからである。また、kala は三六の tattva 全体に広がっている。一般に、五つの bhūta とくれば、世界の開展の最後に生ずる五つの tattva のことであり、物質元素としてとりえられるが、bhūtasuddhi で問題になる bhūta は別のものである。bhūta はこのほかにもそれぞれ独自の性質を持っている。地と風、水と火、また空と最高空は性質が相對する(19)。Somāsambhu はこの性質を利用した bhūta の相互破壊を bhūta の消去の方法として示す。たとえば、水と相對する性質を持つのは火であるから、水に火の性質を獲得させ水独自の性質を破壊して、水を火にする(22b)。水は火の性質を得ることにより、水を破壊できるより優位の bhūta になるのである。逆に火には水の性質を得させる。このようにして五つの bhūta を変質させる。ここでは変質によって五つの bhūta を消失させることが浄めであると考えられている。

この二つの浄めのあと、身体全体を amṛta (甘露) に浸し、身体は完全に清浄になる(28)。

tattva の帰入による消去は ātman を dvādasānta へ到達させる行為と同時に起るものだが、dvādasānta と ātman は

Siva と結びつく。一方、 tattva を原因く帰入せしむる行為は dikṣā とせしむる Siva と結びつための「道」(adhvan) の一つである。また、 bhūta と一致する kala も tattva と同様に dikṣā との「道」の一つである。この「道」によつて人は Siva と結びつく。したがつて、 ātman を身体から離して、 tattva と bhūta の消去によつて身体を浄めるとは、 ātman を取り巻く不浄を除去する行為、すなわち ātman を Siva と結合せしむる行為と考へることができよう。

(2) nyāsa

清浄になつた新しい身体に、引き離されてつた ātman が結びつけられる。これが後半部分の nyāsa である。III. 28b-30 はその過程を次のように述べる。

adhāra と呼ばれるもの、 ananta、 dhārma、 jñāna など五つの中のひとつ成る (28b) 座を心臓に与え、 それを mūrṭi とする。開展によつて Siva になつた ātman を dvādasānta からそれ (mūrṭi) と招請する。(29) それを ātman (ātman) を、 vāusat と呼ぶ。 sakṛimāntra と呼ぶ。 全体的に神の amṛta と浸して、 sakalīkṛti を行ふ。(30)

ここに述べられた過程を要約すれば、心臓に座を設け、その上に mūrṭi (微細身) を置き、 ātman を開展の方向へ降下せしめ、 mūrṭi を招請する。そしてそれを amṛta と浸したのが、 ātman

に身体の各部分に結びつける sakalīkṛti という儀式を行なう、 ということがなる。 sakalīkṛti とは、 angamāntra (肢を表わす mantra) を唱えながら、 指し mantra を心臓をばじめとする、 という部分に置く動作をするので、 ātman が身体に結びつけられる (31)。 mantra を指し「置く」こと、 ātman が身体に結びつけられるので、 以上の過程は nyāsa 「置く」ことといわれる。

以上から、 ātmasūddhi は解脱のための dikṣā を基礎として置くことが明かである。 ātman は汚れた身体に結びつけられてつる。そこで、 ātman を身体から離して dvādasānta へ到達させ Siva と結合せしむる。同時に tattva を帰入せしめ、 tattva を消去し微細身を浄め、 ちからを bhūta を消去し粗大身を浄める。そののが、 Siva と結合した ātman を清らかな新しい身体に結びつける ātmasūddhi と呼ぶのである。 tattva と bhūta=kala は dikṣā とせしむる Siva と結びつ「道」である。したがつて、 ātman と Siva の結合は、ちからを解脱に他ならぬ。したがつて、 ātmasūddhi の目的は、儀礼執行者が解脱と同じ状態を得ることであると言へるのではないだろうか。 Siva を礼拝しよつとせしむる者、は、解脱を求めて自分の ātman が Siva と結びつくことによつて得られる。 Siva と同じ完全なる清浄性が必要だと考へられて、このことが、 ātmasūddhi と呼ばれる。(32)

このことが、 ātmasūddhi は dikṣā と結びつく構成されて

いるように見える。しかし、浄めの儀式をすべて終えて、*upa-*
āra に入ると、わたしたちは *ātmasuddhi* に非常によく似た儀
式に再び出会うことになる。それは礼拝するために Siva 神を招
請する儀式で、解脱や浄めに直接関係するものではないが、空間
の構造と過程が *ātmasuddhi* とほとんど一致している。*ātma-*
suddhi と Siva 神招請の儀式はどのような関係にあるのだろうか。
そこで、次に Siva 神招請の儀式を詳しくみることによって、
両者の相似点を明らかにしたい。

2 Siva 神招請の儀式との相似

Siva 神の本質は「すべての主、すべてに広がり、力ある者、
すべてを知る者、すべてを行なう者、覚醒と歓喜に満ち、遍在し
部分がなく、自ら光る者」(G1-G2a)と考えられているように、
Siva は世界に遍在していて特定の形を持たない。人が礼拝を行
なうためには、その対象となる明確な形が必要となる。そこで
Siva に身体を与えるのだが、このような身体を *mūrti* といひ、
Siva の *mūrti* は一定の作業を経たのも *Sadāsiva* となる。Siva
にはその状態によって様々な名がつけられているが、*Sadāsiva* は
人々の礼拝の対象となるときの Siva の名である。⁽¹³⁾ Siva は玉座
上に招請され、用意された *mūrti* に結びつけられる。したがっ
て、Siva を招請することは、Siva に明確な姿形を与えること
と言ひ替えることができるだろう。Siva は遍在するものなのに、
一点に集中するのは矛盾のように思われるが、Siva の降臨は

Siva が人々の礼拝を受けるべく人々の方を向いている状態を意
味し、Siva の遍在性を排除しない(66-69a)。

礼拝儀礼 *upācāra* を私たちが実際に目でみると、儀式は
piṭha という台座の上のった *linga* に対して行なわれる。しか
し、礼拝の対象はあくまでも *Sadāsiva* であり、*linga* は儀式
のあいだ Siva が宿る物である。つまり、*linga* は Siva その
ものではなく、Siva が降臨し宿る身体を表わしたものにすぎな
い。また、この場合 *piṭha* は Siva の玉座を表わしている。し
たがって、礼拝のために玉座を設け *mūrti* を置き、Siva を招
請し *Sadāsiva* を形成するという作業は、いわば観想の力によ
って行なわれると考えてよい。

(1) 玉座 *asana* の設置

Siva の玉座は一般に、*anantāsana*・*siṃhāsana*・*yogāsana*・
padmāsana・*vimalāsana* という五つの座からなり、全体で蓮の
形をしている。その構造は聖典や手引書の著者たちによって多少
異なるが、*Somaśambhu* の場合、玉座は土台となる *adhārasīlā*
そしてその上の *anantāsana*, *siṃhāsana*, *padmāsana* という四
つの座によって構成される。その形成の仕方は次のとおりであ
る。

まず、世界の土台である亀の形をした石 *adhārasīlā* にすわる
adhārasakti を祭る。 *adhārasakti* は乳海のように身体が白く、
種子の中の芽の形をしている(47)。

次に、*adharaśāṭī* の上の *anantāsana* を祭る。これはシャスミンや月のように白く、直立した茎の上につぼみがある水蓮の形をしている。また同時に、この座を支配する *Ananta* は有名な蛇の名として知られ、実際他の多くのテキストでは、蛇のように描写されている。

そして、この蓮の茎を取り囲む、玉座の四本の脚である *siṅhāsana* を礼拝する。これらは獅子の形をし、お互いに背を向けた状態にある。また、これらは方角によりそれぞれの *yuga* ・力・色を表わしている。南東の脚は *kitayuga*、力は *dharma*、白色である。南西の脚は *tretāyuga*、*jāna*、赤色、北西の脚は *drāparayuga*、*vairāgya*、金色、北東の脚は *kaliyuga*、*aiśvarya*、黒色である。(49-50)

次に、先述の *anantāsana* の蓮のつぼみが *siṃhāsana* の上でのその白い八枚の花びらを開く。これが *padmāsana* としてこれを礼拝する。(51)

さらにこの上に雄薬と果皮がある(52)が、この玉座の設置は観想によって行なわれるものであり、いま見たように、アニメーションのように動きのあるものである。

(2) *mūrti* の設置

次に玉座の上で *Siva* の *mūrti* を置く。礼拝の対象となる *Sadaśiva* の具体的な姿がここに述べられる。

清浄な水晶のように汚れがなく、結った鬚の輝きに満ち、瞬く

半月を頭上にたたき、五顔、三眼、十腕で、右の右手には槍・剣・三叉の矛・棍棒・*varadamudrā* があり、左の右手には *damru* ・シトロン・蛇・*akṣa* の種で作った数珠・青い蓮がある。三三の印を持ち、*padmāsana* 坐法で座している。(57-60)

(3) *Siva* の招請

そして、次に *Siva* 神を招請する。この過程を III-62b-64a は次のように述べる。

Brahman などの *kāraṇa* を捨て去ることで、*mantra* を *Siva* の場所に導き、(62b) それから、額の真ん中にあるきらめく月の光のような、六つの肢と結びついた、*Bindu* の形をした最高の *Siva* が(63)花を持った手のひらで来た、と考えて、目的の *mūrti* に結びつける。(64 a)。

Aghoraśiva の書の注釈者による *Nirmalamāñi* とよばれる(47) 62b の意味するところでは、*prāsādamantra* を唱えることにより、*Siva* 神の乗り物としての *mantra* を *Siva* 神の場所まで持つて行くこととあるという。*prāsādamantra* は一二あるいは一六の部分 (*kaṭā*) から成り、それぞれの *kaṭā* に名称・形・音の継続時間・色などがあり、同時に三六の *tattva* ・人体の領域に対応し、その領域を支配する者がある *kāraṇa* が定められている。(15) 何人かいる *kāraṇa* の中で *Brahman* を含ませている。 *Brahman* などの *kāraṇa* を捨て去ることで、*prāsādamantra* の内の各領域を「から上へと移動すること」を意味し、三六の *tattva*

を展開とは逆に原因へと進むことと同じである。こうして到達するところから Siva の場所である。Siva 神招請の場合、上昇して Siva の場所に向かうのは Siva 神の乗り物である mantra である。

mantra が Siva の場所に着くと Siva はあらめく月の光のようになり、六つの肢と結びつくと(意味不明) Bindu の形になる。prāsadamantira は舌から肩間までの kala の領域におおって形が点 (bindu) となることから、これは Siva が mantra と一体化し肩間まで降りたことを意味する。そこで Siva を、花を持った手のひらに出して、花ごとを mūrti に結びつける。Nirmalamāni によれば、Siva は吐く息ごとを執行者の右の鼻孔から出て花に乗って mūrti の上まで行き、そこから中に入り込む。目でみる形では、花を linga の上に置くという動作が行なわれる。

(4) sakalīkaraṇa

mūrti にやがて来た Siva をその身体のごく上かの部分に結びつけ、身体を完成し、amrita に変形する(70)。身体の部分とは、心臓・頭・鬚・鎧・武器・眼とこうそれぞれ Siva の持つ力を象徴する六つの部分のごとくあり、aṅgamantira (肢を表わす mantra) を唱えて結びつける。以上で礼拝の対象となる Sadāśiva が完成し、このあと礼拝が行われる。

以上の Siva 神招請の儀式が atmasuddhi と一致する点を整理すると、次の二点だけとあることができるだろう。

第一に、ātman と ātman の取り巻く空間的構造が、Siva とそれを取り巻く構造と一致している。

まず、Siva を招請するため玉座を設置する。この玉座は、(1) ādharaśīla (2) anantāsana (3) simhasana (4) padmasana から成る。一方、ātman を招くため玉座が設けられたが、その構造は

(a) ādhara と呼ばれる (b) ananta (c) dharmā・jñāna など五つのもので

から成るところ。Siva の玉座と ātman の玉座の構造を比較すると、(1) ādharaśīla と (a) ādhara と呼ばれるもの、(2) anantāsana と (b) ananta は疑いなく一致していることがわかる。問題は、(3) (4) が (c) 一致するかどうかである。(c) は Lachakux は次の二つの読み方を示している。⁽⁷¹⁾

① 「dharmā・jñāna など五つのもので」は dharmā・jñāna・varīgya・aiśvarya・padma の五つである。この場合、前の四つは simhāsana の四本の脚の名であることから、(c) と一致し、残りの padma は (4) padmāsana と一致する。

② 「dharmā・jñāna など」は simhāsana の四本の脚を指し、(c) と一致する。「五つのもので」を意味する pañcaka はカンティール伝本と同様に pañkaja と読む。pañkaja は padma と同義であることから、(c) と一致する。

①②のどちらの考えを採用しても③④と⑤は一致することになり、したがって Siva の玉座の ātman の玉座の adharasīta・anantāsana・simhāsana・padmāsana の四つから成ることとなる。

次に linga の台座である pīṭha は Siva の玉座を表わしてゐるが、pīṭha は寺院内の聖域に据えられしむ。一方、ātman の玉座は心臓に与えられる。このことから、寺院の聖域と心臓、ならびに寺院と儀式執行者の身体は対応してゐると考えられる。

そして、Siva は玉座の上で置かれた mūrti に招かれ、ātman も同じように玉座上の mūrti に招かれる。

このように、Siva・mūrti・玉座・聖域・寺院という構造は、ātman・mūrti・玉座・心臓・儀式執行者の身体という構造と完全に一致してゐる。

第二に、この構造の一致とよんで、儀式の過程が同じである。つまり、寺院内の聖域あるいは身体内の心臓に玉座を設置し、その上で mūrti を置き、Siva あるいは ātman を招請し、それぞれの mūrti に結びつけてこれを礼拝する。

また、ātmasuddhi の場合、ātman を管を通して上昇させ dvādasānta と Siva に結びつけたのを、浄められた身体へと下降させる。Siva 神の招請になつてこれと対応するのは、Siva を mūrti と招く前に Siva の乗り物として mantra を上昇させ、Siva の場所と静め、Siva を降下させるという作業がある。ātman と Siva との mantra の形を借つて、その mantra は必ず三次

の tattva の帰入と同じように移動して Siva の場所 dvādasānta に達し、次に逆の開展と同じ方向へと移動する。このらも上昇と下降、帰入と開展という動きをする。ただ、ātman は身体と結びつけてゐるため dvādasānta へ上昇させられるが、Siva は初めから Siva の場所について降下するだけである点で、両者は異なる。そして最後に、angamantra を心臓などの身体の部分に唱へ置くことに、mūrti と ātman あるいは Siva を結びつける。mūrti に結びつけられた Siva はその後礼拝を受けるが、ātman の礼拝も同様に行なわれ(34b)。そして、ātman は「心臓の蓮とよぶ Siva」と表現される。

結論

ātmasuddhi の目的は ātman を浄めることである。ātmasū-
adhi とは目的のため、ātman を Siva の場所 dvādasānta へ導き Siva と結合させた。Siva 神を礼拝しようとする者は、Siva と同じ完全なる清浄性が必要なのであり、Siva との結合はそれを実現するのである。また、ātman を Siva の場所へ導くために ātman を上昇させて身体から離し、Siva と結合した後の ātman を下降させて身体に戻した。この手順は、tattva の帰入と開展と同じものである。

tattva の帰入を Siva と近づけて「道」として採用してゐる。たゞ dikṣā とある。tattva を一つ一つ捨つた後、ātman は汚れを離れ、Siva へ近づいて、汚れからの解放と Siva との

結合、すなわち解脱が *tiṣṭā* の目的である。

このように、儀式の目的がともに清浄性の獲得であり、清浄性は ātman と Siva の結合によって得られるとされることから、ātmasuddhi が *dikṣā* に基づいて構成されていることは疑いないだろう。

一方、*upacāra* ににおける Siva 神招請の儀式は、Siva 神を礼拝のために招請することを目的としていて、浄めや解脱に特に関係していない。ところが儀式の構成が ātmasuddhi とほぼ一致している。それはなぜであろうか。

ここで考えておかなければならぬことは、Siva 神の招請が、Siva 神の降下を意味する、*śūcya* である。すなわち、Siva 神を Siva の場所から *mantra* によって降下させる行為は、ātmasuddhi によって Siva と結合した ātman を身体に戻す行為に相似する。ātmasuddhi は、この相似点に着目して、これを中心としてその他の空間的構造や儀式の過程が Siva 神招請の儀式と同じになるように工夫して構成されているのではないだろうか。なぜなら、両儀式の構成を一致させ、Siva に対して行なうのと同じ行為を ātman に対して行なうことは、ātman を Siva と結合させ、*śūcya* ātman を Siva と同じものとして扱うことを実現するからである。つまり、ātman が Siva と同質化することが強化されるのである。

ātman の浄めは Siva と結合するによって得られる。それゆえ、同じ目的を持つ *dikṣā* を基本として、*śūcya* Siva と ātman の

同質性を強調するために Siva 神招請の儀式の要素を取り入れて、ātmasuddhi は構成されていると考えることができるだろう。

注

- (1) H. Brunner-Lachaux, *Somasambhupadhāti*, *Īre* pt., Pondichéry 1963, Introduction pp. ix-xx.
- (2) 使用したキキムトは、*Ibid.*, Section III, pp. 90-229 の本文中の () 内の数字は Section III の *sloka* の番号を示す。
- (3) *Ibid.*, *Īre* pt., p. 129, note.
- (4) *Ibid.*, *Īre* pt., p. 106-7, note.
- (5) 聖典 Siva 派の *mantra* は、*veda* の *mantra* とは異なり、
om + *bija* + 名 (与格) + 結句
という構造になっている。 *mantra* の中心は *mantra* の *キキムト* が凝縮されている *bija* (種子) の部分で、*bijamantra* はこの *bija* だけ成り立つ *mantra* である。
mantra はこのほか、*mūlamantra*, *samhitāmantra*, などの *mantra* と分けられる。 註 1-2 は、*Ibid.*, *Īre* pt., pp. xxx-xxxvi を見よ。
- (6) 世界の開展によって現われる階梯 *tattva* は、聖典 Siva 派の中でその数でいくつは多少違ふが、*Somaśambhu* は三六を数えよう。*Ibid.*, *Īre* pt., Planche V を見よ。
- (7) *Agloraśiva* などの他の作品の著者だが、*śūcya* Soma-

sambhupaddhati を解説する Lachaux は 'tattva と bhūta の消去を微細身 (sukṣmadeha) と粗大身 (sthūla-deha) とする語を用いて解釈するが、Somāsambhu はこの二語を用いて説明はしていない。微細身と粗大身の二語を使用する場合には、微細身の領域に三六の tattva 全部が含まれたり、粗大身も宇宙的規模に拡大したりして、矛盾や不明な点が多く生ずることになる。この問題については、

- (8) Ibid, 3ème pt., Pondichéry 1977, pp. xiv-xv.
- (9) Ibid, 1ère pt., Planche V.
- (10) 空とは相対する bhūta がなすが、Aghoraśiva は永遠に遍在し清淨である最高空を相対者となす。Ibid, 1ère pt., p. 126-7, note.
- (11) dīkṣā とはさうして Siva と近づくことへ方法として「心の類」(śādhavan) となす kala・tattva・bhūvana・varṇa・pada・mantra の「類」があげられる。(12) 聖典 Siva 派は二元論の立場をとっているので、解説に於ける atman と Siva の結びきは「合一」を意味しない。結びきはするが、両者ははっきり区別される。したがって、結合した両者は「同一」というよりは「同質」であると言えらるべき。Ibid., 3ème pt., p. xiii.
- (13) Sadāśiva は Siva の五つの機能、すなわち世界の創造・維持・破壊・隠蔽・恩恵と結びつけている。詳しくは、Ibid., 1ère pt., pp. x-xi を見よ。
- (14) Ibid, 1ère pt., p. 186-7, note.
- (15) Ibid, 1ère pt., pp. xxxii-xxxiii を及び Planche V を見よ。

(16) Ibid, 1ère pt., p. 187, note.
 (17) Ibid, 1ère pt., p. 128, note.